

王朝物語史序説

坂本, 信道

<https://hdl.handle.net/2324/4495981>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (文学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名	坂本 信道			
論 文 名	王朝物語史序説			
論文調査委員	主 査	九州大学	准教授	川平 敏文
	副 査	九州大学	教授	辛島 正雄
	副 査	九州大学	教授	高山 倫明
	副 査	九州大学	教授	静永 健

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、既成の王朝物語史の、ほぼ定説化しているような見方にも、なおさまざまな問題が伏在することを、10編の各論において、個々の作品の表現に密着しながら、当時の文学を支えた社会状況や、人々の精神性にも目を配ることで、鮮やかに解き明かしてゆくものである。

『土佐日記』と『和泉式部日記』を取り上げた2編は、一見すると「物語史」の枠を外れているように見えるが、これらを「日記」に分類・固定することで見えなくなった問題点を突き止め、前者では『伊勢物語』の昔男や中国の屈原と共通する、流浪する官人の姿を描いていることを指摘、仮名を用いた戯作と捉え、後者では優れた歌人である和泉式部とかかわることが親王にとって重要なのであり、彼の側からの働きかけを想定することで、虚構された物語としての性質を解き明かしている。

『住吉物語』については、散逸した初期段階の姿を、現存資料から『伊勢物語』などにみる素朴な恋愛形態との近似性を認め、霊験譚の要素は後に付加され、そこを肥大化させたものが現存諸本であるとする。

『うつほ物語』については3編にわたって論じ、物語の大団円となる「楼の上」の巻の名前の由来を明らかにし、天人から授けられた秘琴が伝授される場所として相応しい空間であること、さらにそこに繋がる「反り橋」も神聖な空間と日常空間とを繋ぐものであることを、説話や仏典を参照することで明らかにする。また、主人公仲忠が、求婚譚の中心であるあて宮とは結婚できず、帝の第一皇女が降嫁することになる構想が、主人公を恋愛の敗者とせず、一族の繁栄へと導く巧みな仕掛けとして生かされていることを述べる。

『夜の寝覚』についても3編を費やし、女主人公の内面を掘り下げることの特徴があるとする通説に疑問を呈し、物語の始発に置かれた天人による二つの予言は、ともに作中で達成されたと見るべきこと、特に琵琶を国王まで伝えよとする予言は、音楽伝承譚としての『源氏物語』の明石一族の物語を踏まえたものであり、さらには『うつほ物語』の構想とも重なることを指摘する。その一方、『源氏物語』の宇治十帖を引き継ぐような登場人物たちの苦悩への拘泥が、物語の展開力を喪失させていることを、『夜の寝覚』『浜松中納言物語』の両者に認め、物語史の転機が訪れていることを説く。

以上のように、本論文は、王朝物語史「序説」としながらも、物語史研究の盲点を突く形で新たな王朝物語史を描くことに成功している。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を有することを認めるものである。